
呪われし龍姫 1 ～海の瞳を持つ男～

瑞谷龍司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呪われし龍姫1 海の瞳を持つ男

【Nコード】

N0825M

【作者名】

瑞谷龍司

【あらすじ】

海色の瞳に、艶やかな漆黒の髪を持つ、美貌の青年。だが、見た目とは裏腹に彼は非常に好戦的な性格で 異世界を舞台に暴れまわる、一人の青年と一人の少年の冒険譚。

海の瞳を持つ男

かつてその優美さと文明の高さを誇った大国、オルヴァデイス。龍人族ドラグーンという、最強の種族によって治められていたその国は、どの国よりも平和で、どの国よりも美しかった。

緑溢れ、笑い声が絶え間なく響き、気候穏やかなその大国は、しかし今はもう無い。

五年前、何者かによってその大国は滅ぼされた。

国民も騎士たちも王族も、すべてが根絶やしにされた。

その後、巨大な氷漬けにされ、国の美しさだけは保たれたまま、生きるものは全て消されていた。

生き残りは皆無に等しい。

そう、思われていた。

この事件の五年後。物語はそこから、始まる。

海色と赤髪

丘の上に寝転がり、ぼんやりと空を眺めながらあくびを一つした。青年はごろりと横向きになると、そのまま間を置かず寝息を立て始めた。

ぐるると腹がなっているのにも関わらず寝入るところは、この青年のお気楽さを表しているのかもしれない。

こう見えて、もう三日も何も口にしていないのだ。

と、風の音に混じり、どこからか音が聞こえてきた。

可愛らしい、鈴の鳴るような音。

いや、声だろうか。

同時に、とたとたと軽い足音が聞こえる。

「
」

だいぶ近くなってきたようで、しかしそれでも言葉は聞き取れない。青年はぴくりとも反応しない。

「
さまぁー。」

足早に声が近づく。

小高い丘を駆け上がり、声の主が見えてきた。

まだ幼い面差しを残した、可愛らしい少年。十ほどだろうか。立ち上がった薄く赤い髪がさらさらと揺れる。大きな瞳は少々垂れ気味で、それがさらに大人しそうな印象を与える。

慌てて駆けてきたのだろう、息が相当上がっていた。

「ひ、ひめっ、姫様ぁー。」

ひいひい言いながら青年の下に辿りついた瞬間、寝ていたはずの青年の腕が少年の頭をはたいた。

「あだっ！」

「ったく・・・姫様はやめろっつったろ。」

むくりと起き上がった青年は、はっとするほど美しかった。

後ろで束ねた漆黒の髪は、美しくなびいている。猫目の大きな瞳

は目の覚めるような青い色をしていた。まるで海の色のような上品で端正な顔をしかめさせ、少年を再び小突いた。

「もっ、申し訳ありませんっ。」

「あとその言葉遣いやめろって。」

美しいその声は、まだ幼い少年のように高く澄んでいた。

立ち上がったその青年は意外と背が低かった。少年と比べてもやはり小さめに感じる。それだからだろうか、よりいっそう女性らしさが覗える。

「んで？ どうした、ロア？」

はい、と少年、ロアがどこかを指差して笑った。

「ヴァン様！ 食料がもらえそうです！」

「お、やったな！ どこでだ？」

指差した方を見ると、そこには、集団で人間たちが集まっていた。

「あそこに、大勢の人間が集まっていました。食料を分けてもらえるかもしれません。」

よく見れば、一つの馬車を中心に集団が集まっている。耳を澄ませば馬の切ない嘶きが聞こえた。

どう見ても、襲われているように見える。

「お、ありや盗賊どもだな。お手柄お手柄。行くぜ、ロア！」

「お供します、ひめ・・・ヴァン様！」

凄まじい速さで丘を下り降り、その集団に向けて走り続けた。

「ロア、あいつら、ちよつと脅かしてやんな。」

ぎよつとしてヴァンの顔を見た。

「え、いいのですか。食料分けてもらえなくなりませんか？」

にやりと意地悪く笑う。

「いいのいいの。あいつらは悪い奴らだ。だからそいつらから食料奪っても俺らは悪くないんだよ。」

「なるほど、さすが姫様！」

「もっかい殴りたいのか？」

「あつ。す、すいませんっ。」

はっとして、慌てて謝りながらスピードを上げた。
「では、行きます！」
ひゅ、と鋭く呼気を吐き、力を両手に溜め始めた。

盗賊から強奪

ふん、と腹に力を入れる。

「サンダークラウド！」

そう言った途端、前方の雲が一瞬にして真っ黒に変化し始めた。

「ターゲットを確認。」

両手の人差し指と親指を合わせ、円を作った。その円から盗賊たちを見つめる。

「ローリング・ボルト！ ショット！」

いきなり黒雲からいくつもの雷が飛び出し、盗賊たちに降りかかった。

「うお、うわあああ！」

「なんだあ！？」

「うあああああ！」

口々に叫ぶが早いか、全員雷にぶち当たり、悲鳴を上げながらどさりと倒れた。

立ち上がる者は一人もない。

襲われていた人物は頭を抱えてしゃがみこんでいたが、自分には何も当たっていないことに気づき、そつと顔をあげた。

その目の前には、いつの間にかいたのか、ヴァンがにこにこしながら立っていた。

「これ、は・・・あんた方が、助けてくれたのか？」

「ああ。まあ、今の雷はこいつだけだな。」

ぺこ、と口が頭を下げた。

「こんな小さな子が？」

む、と口を尖らせた。

「今年で十です。子どもではないのです。」

ぽんぽん、とヴァンが頭を軽く叩いた。しかし不機嫌顔は直らない。

「さて、もう三日は食ってないんだ。飯食うぞ。」

早速盗賊の荷物をごそごそ漁り始めた。

「はいです、ひ・・・ヴァン様。」

ロアも金目の物には一切目もくれず、食料だけを袋に詰めていった。男は、盗賊から物を盗む二人を啞然と見つめている。

「ヴァン様。ここで食べるのはお行儀悪くないですか？」

その場で食料を口に放り込むヴァンを、ロアが諫めた。

「ああ？ 行儀も何も、もうそんなのとづくに必要なえだろ？ お前もここで食っちまえよ。」

「ヴァン様・・・もつと気品とか、意識されたほうが・・・最近のヴァン様はどんどん野生的になられて・・・」

心から悲しげにため息をついた。

「ヴァン・・・？」

はつとして、男が立ち上がった。

「も、もしかして、あんた、ヴァン・ガンダルヴァか！？」

口に肉を頬張りながら、ヴァンが振り返った。

「むうむむむんむ？」

何か言いたそうにしているが、もごもごして聞こえない。

「ヴァン様。お行儀悪いです。」

ごくく、と大きな塊を飲み込むと、ヴァンは改めて聞いた。

「何で俺の名前知ってんだ？」

男が目を輝かせ、珍しそうに二人を見比べた。

「じゃあやつぱり！ 『護り屋』ヴァンと言えば知らない者はいないよ。実は私の町も救われたんだ。魔物に襲われていたところを助けられたと人づてに聞いていて・・・」

「へえー。」

さも他人事のように返事をする、再び肉を食べ始めた。

「お礼させてくれないか？ 一度ならず二度も救われたんだから。」
背中を向けながら手を横に振る。

「いらねえって。欲しい物はとりあえず食料だし・・・あとは・・・」

「

水を飲みながら、ヴァンは振り返った。

海のように深い瞳は、ひどく真剣な眼差しをしていた。

「あんた、商品に詳しいか？」

「商品、かい？」

ヴァンの迫力に気圧されながら、男は自分の馬車から紙を取り出した。

「一応、私は商人をしているからね。何が知りたいんだ？」

ちらりとヴァンとロアが目を見合わせた。

「分類名は宝石です。」

ふむ、と男は紙を捲った。

「商品名は・・・『龍眼』。」

男はぎよつとして手を止めた。

「あ、あんたたち、『龍眼』を探しているのか？」

「知ってるのか？」

「そりゃあ、商人仲間の間で知らないやつはいないよ。幻の商品だからね。本物の瞳だと噂される身の毛が立つほど美しい宝珠。でもどうしてそんなものを？」

「・・・興味本位ってやつさ。んで？ どこにあるのか知らないのか？」

紙を見つめながら、男はむうん、と唸った。

「残念だが、私のリストには載ってないね。まあ、当たり前だ。仲間内でもその情報がやりとりされたことは聞いたことないしなあ・・・」

「そう、か。おっさん、有難う。」

もう満足したらしく、ヴァンは腹をさすって笑った。

「さてと。飯も食ったし、行くか。」

「はい。」

さっと立ち上がり、二人は歩き出した。

「あ、待ってくれ！ どうしてあんたたちは龍眼を探しているんだ？ 手に入れることは元より出会うことすら至難の業なのに。」

首だけを男に向け、にやりと笑った。

「言つたろ？ ただの興味本位だよ。」

じゃあな、と振り向きもせずと言った。

男はただ、二人を呆然と見つめるしかなかった。

宿探し

二人は町に着くやいなや真っ先に宿屋を探し始めた。腹いっぱいになったので、とにかく寝たいとヴァンが駄々をこねたからである。

確かにロアもどこかで休みたかったので即座に賛成した。辺りを見回しながら歩き続ける。

「そうだ、ロア。」

「はい？」

「また高そうな宿なんか選ぶなよ。そんなに金があるわけじゃないんだし。」

「で、ですが姫様……」

「ごちん、と頭をはたいた。」

「いだい！」

「俺らには貧乏宿で十分なの。あと姫様はやめろ。」

「わ、わかりました……」

しよぼんとロアが肩をすぼめる。その頭に、ぽんと手を乗せた。

「悪い悪い。ほら、あそこに宿、見えてきたぞ。」

見ると、すぐ近くにいかにもぼろそうな宿が見えていた。

「行こうぜ。早く昼寝してえ。」

「はい、ヴァン様！」

人ごみを掻き分け、ぼろいドアを開けた。

かび臭さがつんと鼻をつく。いかにも古宿といった感じた。

「ヴァン様……ここですか？」

「嫌か？」

「いえ、私はいいのですが、ヴァン様は……」

「いや、俺は大丈夫だけど。お前が嫌っていうなら替えるぞ？」

「いえ、そんなことは。」

さっさとヴァンは中に歩き出していった。慌てて後を追う。

カウンターには、仏頂面したおばさんが座っていた。

「すいません。部屋は空いてますか？」

本を読んでいたのか、下を向いていたおばさんが面倒くさそうに顔をあげた。

「何人だい？」

「二人、泊まりたいんですが。」

「んー？」

眼鏡をかけ、ヴァンの顔を凝視した。

その途端、おばさんの顔がぱっと赤くなった。

「あらあら、いい男だねえ。」

「いえ、そんなことは。」

少し恥ずかしそうに笑う。それが女心をくすぐるのだろっ、おばさんは顔を上気させて聞いた。

「いくつなんだい？」

「今年で二十一になります。」

「あらあ、若くていい男。あたしがもう少し若ければねえ。」

「いえいえ、今でも十分魅力的でお美しいですよ、奥様。」

にこ、と爽やかな笑顔を向けられ、おばさんはよりいっそう顔を赤くした。

「部屋は空いてますか？」

「ああ、空いてるよ。ええっと、二人一部屋でいいのかい？」

「ええ。お願いします。」

にこにこしながら宿帳に名前を書いた。

「はい、これが部屋番号。二階だよ。ゆっくり休みな。」

おばさんは後ろを少し振り返った後、こそりと耳打ちした。

「宿代は安くしておくよ。旦那には内緒だからね。」

「ありがとうございます。」

にこにこしながらおばさんに挨拶して、番号を確かめながら廊下を歩いた。その後ろにいた口アが不満そうにぼそりと呟く。

「相変わらず流石ですね。女殺し。」

部屋のドアを開けながら、にやりとヴァンは笑った。

「ふっ。処世術と言って欲しいな。」

中に入ると、重そうな荷物をどさりと落とした。

「はああー。重かった。結構歩いたなあ。汗かいたまった。」

ベッドに腰掛けると、汗だくになった上着を脱ぎ始めた。

下に着ていた服も脱ごうとして、ロアが慌てて止めた。

「お、お待ちください姫様！ 私、外に出てますから！」

「ああ？ 何言ってるんだよ、お前。」

ばさりと服を脱いで上半身裸になった。

ひゃあ、と慌ててロアが目を手で覆う。

「何してんだよ。」

くすくすと笑う。それで、はっと気づいてロアは顔をあげた。

過去と現在

細身の体なのに筋肉がしっかりとついた、ごつごつした男の体があった。

「五年も経つのにまだ慣れないのか？」

くつくと笑う。その腹部には、深々と大きな傷が残されていた。

「そ、それでも、姫様の体は姫様の体です。やはり私は外に出てます。」

「いいよ、堅苦しい。それに俺だってもう、慣れたさ。」

その言葉の響きが悲しくて、ロアも肩を落とした。

「・・・もう、五年も経つですね。」

「ああ。早いもんだ。」

俯いていたロアが、恐る恐る顔をあげた。

「あのう、姫様。」

「また言いやがったな。」

殴ろうとしたその手を、力なく落とした。

「まあ、二人の時はいいか・・・」

「それなんですが、姫様・・・」

殴られるのを覚悟で、ロアが強い目でヴァンを見た。

「二人の時くらいは、姫様にお戻りになりませんか？」

びく、とヴァンの鼻が動いた。

「どういう意味だ？」

「あなた様は、姫様です。」

ぐ、と拳を握って言った。

「だから、二人の時くらい、我慢なさないでください。姫様はいつも、私たちのことを考えて、我慢なさいます。ですが、今くらい・・・」

涙目になるロアに、優しく笑いかけた。

「お前にはいつも、苦勞をかけるな。」

「姫様・・・」

穏やかに、ゆるゆると首を振った。

「でも、それは出来ない。もしここで戻ったら、くじけてしまいそうなのがするんだ。それに俺は、このままでも良いと思ってるよ。」

「な、何を!？」

「俺は『ヴァン』であることを気に入ってるよ。あの男さえ倒せれば、俺はこのまま『ヴァン』であつてもいいと思ってる。だから、姫様とはもう呼ぶな。」

「いいえ・・・ダメです。だって、姫様は、姫様・・・」

ぐす、と涙を堪え、鼻を嚙った。

「そう。俺は俺だ。それは変わらないんだよ。」

そう言つてロアの頭を優しく撫ぜた。

「ありがとう、ロア。」

一瞬、かつての姫の姿が見えた気がして、ロアはまた声を上げて泣いた。

「しょーがねえなあ、お前は。昔っから泣き虫なんだからよ。」

はい、と布を顔に押し当てた。両手で受け取り、ぐりぐりと顔を埋める。

ヴァンは新しい服に着替え、ごろりと横になった。

「そっぴや、あの男の情報は入らねえなあ。」

やっと布から顔を離れたロアが、赤い鼻を嚙りながら言った。

「そうですね・・・まさか、同じ名前を使っているとは思えませんか・・・」

「・・・あの時も、偽名、だったんだろうな。」

「・・・どうでしょうか・・・」

重い沈黙が二人を包む。

それに耐え切れなくなり、ヴァンは背中を向けた。

「悪い、寝る。もう眠い。」

「・・・はい。私も、休ませていただきます。」

ぺこりとお辞儀をし、ロアも自分のベッドに潜り込んだ。

「何時くらいにご起床なさいますか？」

「ん・・・まあ、自由でいいよ。お前、先に起きて腹が減ってたなら、先に食べてていいからな。外にも食事行ってもいいから。」

「承知しました。」

「じゃ、おやすみ。」

「はい。おやすみなさいませ。」

もう一度頭を下げ、ロアはベッドの中で丸くなった。

ヴァンは深くため息をつく、そっと目を閉じた。

あなたに言いたいコト

音が、聞こえた。

悲鳴や怒声や叫び声。聞いているだけで震えてしまうほどの断末魔や、笑い声も聞こえた。

敵が来た。奴らが来たのだ。
だから。

共に戦うと誓った。

彼と共に生きると誓った。

傍にいと、誓い合った。

なのに。

どうして。

今まで国を護り、民を護り、味方を護ってきた剣が、仲間の血で染め上がっていく。

どうして、と浮かんだ疑問も、口にすることすら出来なかった。

大量の血とともに、生気が抜けていくのを感じる。

最早、自分はこれまでだと悟っていた。

ただ、どうしても聞きたかったことがあった。

ねえ、あなたは。

あたしを愛してくれていたの？

それすら、偽りだと言うのかもしれない。

ただ、確かなことがある。

あたしは、あなたのことを。

愛していたよ、アーウィン。

はっとして、飛び上がるように起き上がった。

「姫様、大丈夫ですか？」

心臓が耳元で鳴っているかと思うほど、鼓動が強く聞こえている。
隣でロアが心配そうに覗き込んでいた。

「また・・・あの夢を見たのですか？」

「・・・ああ。」

差し出された水を一口飲み、ようやく落ち着いた。

「・・・あの男の名を、呼んでいましたよ。」

「・・・そうか。」

何も言わず、ヴァンは起き上がった。

「今、何時だ？」

「夜の九時です。」

水を一気に飲み干すと、にこりと笑った。

「お前、飯は？」

「いえ、まだ食べてません。」

「おし。食いに行くか。」

心配げにロアは見つめていたが、ヴァンの笑顔を見ているうちに、
にこりと笑った。

「はい。お供します。」

必要な物だけ持って、二人は夜の街に出た。

星の祭り

「ヴァン様、あれってなんでしょうか。」

テーブルについて注文した後、ロアが不思議そうに入り口を指差した。

入り口のドアは開け放たれていて、中から外を見ることができ、なんだか騒がしい太鼓や鳴り物の音と共に、被り物を被った人間たちが楽しげに踊っていた。

「さあ？ 祭りか何かじゃないか？」

二人で興味深げに見ていると、料理を運んできた給仕の男が話しかけてきた。

「お客さんたちは旅人かい？」

料理を早速口に入れながらこくりと頷いた。

「そう。俺たち、アカネから来たんだ。」

へえ、と男が意外そうに目を丸めた。

「あの商業国アカネから？ ずいぶん遠くから来たんだね。」

「はい。遠かったです。」

ロアがにこりと笑って料理を受けとった。

「なあ、お兄さん。あれは何やってんだ？」

にこ、と快活そうな笑顔で答えた。

「あれはね、この町独特の祭りなんだよ。ここは昔は星信仰の村だったんだ。今では信仰自体は無いけど、でもお祭りだけは残っているんだ。」

「お祭り、ですか？」

「うん。ここではちょうど今の時期がお祭りなんだ。面白いだろ？」

「私、お祭りは初めて見ました。」

きらきらと目を輝かせ、食事も忘れて見入っている。

「そうか、ロアは初めてだったか。」

「はい。あの・・・少し、見に行ってもいいでしょうか？」

「ああ。これ食べ終わったら、一緒に行くか。」
「はい！」

急いで食べようとするのを諫め、ようやく食べ終わった頃には、祭りは最も盛り上がっていた。

お茶を飲んでいたヴァンがちらりと外を見た。

「お、ちよいどいい具合に盛り上がってんじゃねえか？」

「ヴァン様、行かれますか？」

そわそわしながらロアが身を乗り出した。

「そうだな。行くか。」

お金を支払い、外に出ると、祭りの熱気がぶわりと頬を打った。

わあわあと人々の楽しげな声に混ざり、太鼓の音や鈴の音や、愉快な踊りをしながら練り歩く道化。

一人の道化が、ヴァンたちの前に来た。

ちよろりとお辞儀すると、両手を上に広げた。

その手を前に出した途端、両手から白い花が一輪ずつ現れた。

どうぞ、と言うように差し出される。笑って、ヴァンとロアは受け取った。

受け取った瞬間、花はまるで星のように光り輝いて分裂し、消えていった。

「す、すごいです！」

またちよろりとお辞儀をすると、集団の中に戻っていった。

「今の花は何だったのでしょうか？」

くす、とヴァンが軽く笑った。

「あれも魔法だよ。炎系の魔法。」

「では、私にも出来るでしょうか？」

「ああ。練習すればすぐに出来るんじゃないかな。」

満面の笑みでロアが笑った。

「出来るようになったら、ヴァン様にたくさん差し上げます！」

「おう、楽しみにしてるよ。」

と、どこからかどおんと大きな音がした。太鼓の中でも一際大き

な音だった。

その途端、今まで踊りまわっていた道化たちや太鼓たたきたちの動きが止まった。まるで、彼らのまわりだけ時間が止まったかのようだった。

そう思うが早いか、道化たちは人ごみに飛び込み、姿を消してしまった。

「・・・何が始まるのでしょうか？」

町の人たちは何が起こるのかわかっているらしく、期待と興奮で皆、目が輝いていた。

「主役が来るのさ。」

いきなり、ヴァンの隣から声がかかった。

見れば、宿屋の女主人であった。

「あんたたちはこの祭りを見るのは初めてなんだね。」

少し酔っているのだろうか。目元が赤い。

「大きな太鼓の音は主役が来るって合図なのさ。」

「主役・・・ですか？」

ヴァンの問いに、得意げに頷いた。

「まあ見てなよ。『星選び』が始まるのさ。」

再び沈黙が辺りを包む。しかしよく見れば、誰も彼もが頬を上気させて待ち構えていた。

しゃん。

どこからか鈴の音が鳴った。

甲高く美しい、透き通った音色だった。

その音は、徐々に徐々にこちらに近づいてきている。

「来るよ。」

そう言うが早いか、道の向こうから緑色の光が光った。

緑の星姫

緑色の何かがふわりと飛びながら、踊るようにこちらに飛んできている。

その下では、踊りに合わせてしゃんしゃんと鈴を鳴らす一団いた。近くで見て、その緑の正体がわかった。

まだ若い、美しい女であった。

皆が皆、その姿を見てうつとりとため息をついた。

「あれが、主役だよ。」

「あ、あれは人なのですか？」

「もちろん、人だよ。ただ、その下の集団はちよつと違ってね。魔族なのさ。」

「魔族っていうと、最も魔力が高い種族の？」

ロアの問いに、前を見つめながら女主人が頷いた。

「その通り。賢い坊やだね。魔族は魔族と違って友好的だからね。人間族と最も親しいのさ。この町も魔族と共存しているんだよ。」

「あの緑の女性は？」

「彼女は主役選ばれた子なのさ。この町で最も美しい娘が星役をやるんだよ。下の集団は魔術で彼女を空に飛ばし、光を纏わせる。星と人、そして人間と魔族が共に生きているという意味を込めた祭りなのさ。」

「美しいですね。あの人も、この祭りも。」

ほう、とヴァンが柔らかく息をついた。

「そうだろう？ あの子の綺麗さは昔から評判だからね。今年で主役をやるのも四回目。慣れたもんさ。」

「ええ。とても綺麗だ。」

穏やかな笑みを浮かべ、緑の美しい星が飛ぶのを眺めていた。

「あの子に選ばれた人は、その年一年、星の加護を得られるんだよ。」

「本当ですか？」

ロアの目がさらにきらきらと輝く。

「私、選ばれてみたいです。」

「まあ、ただの迷信だけだね。」

「迷信ですか・・・」

しゅん、とロアが残念そうに言った。

「ふふつ。それでもね、選ばれるのは名誉なことなんだよ。娘と一緒に飛んで、人々を祝福するのさ。」

「そうだぞ。だから顔を上げて、選んでくれますように祈ってな。」

「はい、わかりましたっ。」

ぽん、と頭に手を乗せられ、再びわくわくしながら緑の星を見つめた。

それにね、と女主人が優しく言った。

「この祭り最大の見所なのがね、この『星選び』なんだよ。星役の娘が一人を選ぶわけだが、これは前日の打ち合わせも何も無い。娘が気に入って、魔人たちが気に入った者だけが選ばれるのさ。」

「旅人が選ばれたりしますか？」

「ここにいる全員が対象さ。まあ、旅人が選ばれるのは滅多には無いがね。おっと、来たよ。」

眩いばかりに美しい緑の女が、笑みを浮かべながら飛び回っていた。
「ここは最後の地点だね。多分、ここから選ばれるよ。」

どきどきとロアは両手を胸の前で握り締めた。

ふわりふわりと浮かびながら踊りながら、女は一人一人に笑いかけた。町の男どもはそれだけでもう、暗闇でもわかるくらいに顔を赤くしている。

時折星役の娘が、ちゃんと鈴を鳴らしたり、魔人が鈴を鳴らす。

ただ、全員が鈴を鳴らすことは無かった。

「あの鈴は誰を選ぶかを決める合図なんだよ。娘が一人一人を確認して選んだ者の前で鈴を鳴らすんだ。ただね、娘と魔人たち全員が

鳴らなきゃ、選ばれたことにはならないんだ。」

少女が空中で一回転をすると、ロアたちの前に降り立った。

音も無く着地すると、挨拶するかのように女主人に笑いかける。女主人もほんの少し、手を振った。

ロアを見て、にこりと笑んだ。魔人の何人かから、しゃん、と音がした。しかし、娘の鈴は鳴らなかった。

「残念だね、坊や。」

がつくりと肩を落としたロアに、にやにやしなからヴァンを見た。

「残念だな、ロア。」

「はいです・・・」

星役の娘が顔を上げ、ヴァンを見た。

「・・・!」

その途端、娘の目が見開いた。

魔人たちもぴたりと止まり、一様にヴァンを見た。

選ばれました

「な、なんだ？」

動揺するヴァンを見つめる。

しゃん。

魔人が鈴を鳴らした。

しゃん。しゃん。しゃん。

魔人全てが鈴を鳴らす。

周りがしんと静まり返った。

緊張が走る。

す、と娘が動いた。

しゃん。

娘の鈴が、高く鳴り響いた。

その途端、周りから割れんばかりの拍手が響いた。

「選ばれた！」

「選ばれたぞ！」

「おめでとう！」

わああつ、と拍手喝采がヴァンを取り巻いた。

「まさか、旅人さんが選ばれるとはねえ。」

女主人も喜びながらヴァンの肩を叩いた。

「行っておいで。あんたに星の加護を。」

「え、ちよつと待って」

にこ、とロアもはしゃぎながら手を振った。

「羨ましいです！ 行つてらっしゃいませ、ヴァン様！」

「ま、待ってくださいよ。」

娘がヴァンの手を取った。抗えず、そのまま前に歩き出した。

魔人たちが祝福するように鈴がしゃんしゃんと鳴る。

娘がしゃん、と一つ鳴らした。

その瞬間、ヴァンの体が緑色の光で包まれた。

ふわりと体が浮かぶ。

「おわつ。」

「大丈夫。楽にしてください。」

優しい声が隣からした。

見れば、娘が優しく微笑みながらヴァンの手を握っている。

「怖くありませんよ。大丈夫です。」

「あ・・・はあ。」

もう人の身長の子二倍くらいに飛び上がっていた。

「あなたはこの町の方ではありませんね？」

「あ、はい。俺は旅人です。」

くす、と娘が可愛らしく笑った。

「旅人さんが選ばれるなんて珍しいですね。」

「そうなんですか？」

「ええ。この町のお祭りはご存知？」

「はい。先ほど、宿屋の奥様から聞きました。」

「そうですか。あ、笑いながら手を振っていただいてもよろしいですか？」

にこ、と笑いながら町の人に手を振る。それにならってヴァンも手を振った。

「お名前は？」

「ヴァン・ガンダルヴァです。星の姫君のお名前は？」

くす、と優雅に娘は笑った。

「シルキーです。」

手を振りながら、ヴァンも微笑んだ。

「この町は美しいですね。この祭りもとても美しい。そして、あなたも。」

「まあ。ヴァンさんはお口がお上手ですね。」

「いいえ、俺は嘘はつけないのです。」

シルキーは笑ったが、緑の光の中でもそうとわかるほど、頬が赤くなっていた。

「そういえばシルキーさん。お聞きしたいことが。」

「はい、なんでしょうか？」

「どうしてあの人々の中で俺を選んでくれたのですか？」

「ああ、それはですね。私一人が選ぶのではなく、下にいる魔人族の人たち 星を飛ばす集団を星団と呼ぶのですが 彼らと共に決めるというのはご存知ですか？」

「ああ、確か打ち合わせも無く決めるのだと聞きました。」

「その通りです。でも、無くは無いですよ。」

シルキーはくりりと一回転をして見せた。

「事前にどういった人にするか少し話し合っんです。今回は、本当は幼い子どもにしようと話していました。」

「幼い子どもに？」

「ええ。でも、全員が全員あなたを選びました。あなたに皆、惹きつけられました。あなたは、その・・・」

さらに頬を赤らめ、照れ隠しをするように手を振った。

「あなたは、とても美しかったから。」

「俺が、ですか？」

「はい。全員が、あなたの美しさに見惚れていました。思わず、祭りを忘れてしまうくらい。」

「いえ、そんな。」

「あなたが女性であつたなら、まず間違いなく星役に選ばれていましたよ。」

「まさか。それは無いでしょう。」

ふふ、と笑った後、優しく娘を見つめた。

「あなたの方が遥かに美しい。星よりもずっと。」

「・・・本当に、お上手な方ですね。」

耳まで顔を赤くした娘は、ふと笑顔のまま黙り込んだ。

「シルキーさん？」

「いえ、その・・・」

言いにくそうに口元に手をあて、思索している。

「どうされました？」

「あの・・・ヴァンさん。この『星選び』の別の意味を、ご存知ですか？」

「別の意味、ですか？ いいえ、聞いてないですね。」

「これは、もうすでに廃れた風習なのですが・・・」

娘の手がかすかに震えている。

「どうされました？ 気分でも優れないのですか？」

「いえ、違うのです。」

勇気を振り絞るように深く息を吐いた。

「この『星選び』にはですね、選ばれた者に星の加護を与えるという意味と共にですね・・・その、結婚相手選びが暗に意味されているのです。」

「結婚相手、ですか？」

「はい。もちろん、今はもう無いですよ。ですが・・・」

顔を赤らめながら、じっとヴァンを見つめた。

「今でも、この『星選び』によって結ばれる男女は無いのです。昔、私の母が星役を担った時、選ばれたのが、初対面の父でした。」

何が言いたいのかわつとわかり、ヴァンは目を丸くした。

「あの、ヴァンさんは旅の身だとわかっています。ですが、もしもその・・・ヴァンさんさえ良ければ、私と
その時だった。」

祭りの一番最初に回る、村の入り口。

そこから、劈くような悲鳴が聞こえた。

邪魔をするもの

ざわ、と周りが騒ぎ出した。

星団たちも、何かと村の入り口に向かいだした。

その上を飛んでいるヴァンたちもそれに向かって飛んでいく。ふわりとシルキーが星団の隣に降り立った。

「何があつたんですか？」

「いや、それが俺らにもわからない。悪いが上から見てきてくれな
いか？」

「わかりました。」

再び上空に浮かび、ヴァンの隣に飛んだ。

「あの悲鳴は一体なんだつたんですか？」

困惑するヴァンに、シルキーも首を傾げて答えた。

「いいえ、それが私たちにもわからないんです。今までは祭りの最
中に何かあるなんて、無かつたので・・・」

「そうですか・・・」

すん、とヴァンが匂いを嗅いだ。

「！」

その途端、それまでの穏やかな顔が一変した。

鋭い瞳で辺りを見回している。

「ヴァンさん？」

「シルキーさん。もつと上に上がることは出来ますか？」

「ええ、出来ますが・・・どうされたんです？」

「すいません。今は説明している時間はありません。とにかく、お
願います。」

その真剣さに気圧され、慌ててシルキーは星団に合図を送った。

浮かんでいた体がさらに高みへと上がった。

油断無く辺りを伺いながら、村の入り口に目を凝らす。

真っ暗で見えないはずだが、ヴァンの瞳には見えていた。

町の入り口から再び悲鳴が聞こえた。人々が奥へ奥へと逃げ惑っている。

その先、町に入る手前の森が大仰に揺れていた。

そこから、獰猛な雄叫びも聞こえた。

「まずい、魔物どもか！」

急いできょとんとした顔のシルキーに声をかけた。

「すいません、降ろしてください！」

「え？」

「いいから、早く！」

その声が星団にも聞こえたらしく、慌てた様子でヴァンを地面に下ろした。

「一体、何があったんだ？」

「魔物が来てる。早くあんたらも避難しとけ。」

それだけ言っと、ヴァンは急いで奥へと走っていった。

シルキーが一拍遅れて降りる。

「どうしたの？」

「魔物だ！シルキーちゃんも早く避難するんだ！」

「え、でも、ヴァンさんは？」

「奥へと走っていった。俺たちも近くの奴から知らせておくから、シルキーちゃんは早くどこか建物へ入ってな！」

「あ、うん、わかった。」

そうは言いながらも、ヴァンの後姿を捜してはいたが見つからず、しばらく人ごみに逆らって歩いた後に、仕方なく建物に避難した。

護り屋と雷鳴

まだ事情を知らない奥の町民たちは、シルキーと飛んでいるはずのヴァンが走ってくるのを見て、慌てて止めた。

「ちよつと！　なんであんたがここにいるんだ！　祭りは？」

「それどころじゃねえ！　魔物が来た！」

ざわ、と辺りがざわめいた。

「な、なんだって！？」

「大型だ、早く避難しとけ！　あと、逃げながらでいいから皆にも知らせてくれ！」

「わ、わかった！」

男たちは慌てて女子どもや老人たちを連れて建物に入った。

辺りは混乱で人の波が収まらない。そこを掻き分けながら、ヴァンは叫んだ。

「ロア！　行くぞ！　何処だ、ロア！」

何処を見てもロアの姿は無い。元々ロアは背が小さいので、余計に見つけにくかった。

「あ、あんた！　こっちだよ！」

その声がするほうを見れば、宿屋の女主人がヴァンに手招きしていた。

人を押し分けてなんとかたどり着く時には、少し息が切れていた。

「ロ、ロアは！？」

「もうとつくに避難してるよ。あんたも早く！」

「いや、俺はいいんです。ロアは中なんですね？」

頷くより早く、宿屋の窓に向かって声を張り上げた。

「ロア！　早く来い！　行くぞ！」

「ちよつと、出て行くより建物の中に入ったほうが安心だよ。ここはそこの魔物が突進したくらいじゃ壊れはしないんだから。」

「いえ、俺らは逃げるわけにはいきません。」

汗だくになりながら、にこ、とヴァンは笑った。

「心配しないでください。奥様は早く、中へ。」

「いや、あんたを置いていくわけにはいかないんだよ。」

「いいえ、大丈夫です。」

「いいから来な！」

無理にでも宿屋に入れられそうになったときだった。

ばん、と二階の窓が勢いよく開いた。

中から、同じくらい汗だくになりながらロアが叫んだ。

「お待たせしました、ヴァン様！」

「遅えんだよ、ロア！」

ロアは今にも旅立てそうな服に着替えていた。

「今参ります！」

そう言うが早いか、ロアは窓枠に足をかけた。

「何してんだい、危ないよ！」

「ご心配なく！」

そう叫び、ロアは窓枠を蹴った。

あ、と女主人が叫んだ。と同時に、音も無くロアは地面に降り立った。

何のダメージも受けず、ロアはヴァンに走り寄ってきた。

「これ、ヴァン様のお召し物です。」

「いらねえ。着替えてる時間は無えからな。武器だけでいい。」

「しかし」

「俺が雑魚にやられるかってんだよ。わかってんだろ？」

ヴァンは二つの剣が刺さったホルダーを背中に背負った。慌てて、

ロアは残りの荷物を袋に放り込む。

女主人が目丸くして二人を見比べた。

「あ、あんたたち、何者なんだい・・・？」

二人で顔を見合わせ、くすりと笑った。

「俺の名はヴァン・ガンダルヴァ。『護り屋』ヴァンと、呼ばれています。」

「私はヴァン様付き人、ロア・ルシェイド。『雷鳴』ロアと呼ばれております。」

女主人が驚くより早く、二人は咆哮の主へと走り出した。

「何してたんだよ、ロア？」

凄まじい速さで走りながら、ヴァンは鼻を鳴らした。

「申し訳ありません。旅支度をしていました。」

「お前がいなくて早く魔物を探知出来ないんだからよ。しっかりしてくれよな。」

「申し訳ありません・・・」

「まあ、今は敵を倒すことに集中、だな。」

「はいです、ヴァン様。」

人々をかくぐりながら、にやりとヴァンは笑った。

「んで？　いつから気づいてたんだ？　魔物。」

「ヴァン様が星役の方とお飛びになられてからすぐです。」

「じゃあ俺が星の姫君を口説いてる間にもう探知してたってわけだ。」

「

く、くどっ！？」

ぎよっと思わずヴァンを見上げた。

くつく、とヴァンは楽しそうに笑った。

「いやあ、あまりにも美しい姫だったもんだからさ。」

「ひっ、姫様！？　お戯れにも限度がございます！」

ロアが顔を真っ赤にしながら怒った。

「怒るな怒るな。言っただろ？　今は敵に集中してな。」

むうつと口を尖らせ、ロアはぼそりと言った。

「ひめ・・・ヴァン様。後でお話しが。」

「ああ。まあ、後でだな。　いるぞ。」

はっとしてロアが顔を上げた。目を細くし、前方を伺う。

「近いですね。」

「ああ。村の中にはまだ入ってないな。」

村の入り口では、すでに皆、建物に避難していた。誰もいないということが不審に感じているのか、魔物は息を潜めている。

「正確な位置は？」

「はい、ただいま。」

す、とロアの目が細まり、森の茂みを見つめた。

何かを数えるようにぼそぼそと呟いている。

ヴァンは双剣をすらりと取り出した。

その時だった。

金色と瑠璃の瞳

「ヴァンさん！」

横の建物から声がかかった。

驚いてみれば、シルキーが窓から身を乗り出すようにして必死にヴァンに呼びかけていた。

「シルキーさん！」

「早くこちらへ！ もう魔物はすぐそこにいます！」

「あんたら何してるんだ！ 早く！」

後ろの男たちも早く来いとジェスチャーをしている。

ちらりとロアを見た。もの凄い集中力らしく、声が聞こえていないようだった。

シルキーたちの方に向き直り、にこりと優しい笑顔で答えた。

「俺たちは大丈夫です。それより、早く窓を閉めたほうがいいですよ。」

「ダメです、ヴァンさん！」

身を乗り出さんばかりに叫ぶシルキーに、よりいっそう穏やかな瞳を向けた。

「シルキーさん。先ほどのお話ですが。」

はっとしてシルキーが動きを止めた。

「申し訳ありませんが、俺はあなたの気持ちに答えることは出来ません。何故なら、俺たちの旅の目的は」

「とロアがヴァンを見つめた。

ロアの瞳の瞳孔が細くすばまり、闇夜にもわかるほど輝いていた。「ヴァン様。わかりましてございます。」

茂みを指差し、鋭く言い放った。

「手前の最も大きな魔獣。奴が、頭です。その他、六匹ほど。」
にやりとヴァンが楽しげに笑った。

「よくやった、ロア。」

そう言ったヴァンの瞳も、ロアのように瑠璃色に輝いていた。

それはまるで龍のような、鋭い瞳だった。

「シルキーさん、話は後です。窓を閉じていなさい。」
ちらりと見ることもせず、ヴァンは静かに双剣を構えた。

シルキーはさらに声をかけようとしたが、星団の一人によって抑えられた。窓がボタンと閉じる。

「ダメ！ まだヴァンさんが！」

「やめろ、シルキーちゃん！ まだわかんないのか？」

まだ駆け寄ろうとするシルキーに、別の星団の男が言った。

「俺たちは魔力を持つてゐるからわかるけど、大型の魔獣が何匹か来てる。この町の魔人じゃ勝てないくらいのやつだ。だけど、そいつなんかよりも・・・」

こく、と窓を押さえていた男が頷いた。

「そいつらなんかよりも、あいつらのほうがやばい。」

シルキーが動きを止めた。

「どういう、こと・・・？」

「あの旅人の名前、『ヴァン』なんだね？」

意味がわからず、こくりと頷いた。

「それならわかる。あいつ、『護り屋』ヴァンだよ。シルキーちゃんだって聞いたことあるだろ？」

「え・・・？」

シルキーは啞然としながら呟いた。

「あの、『護り屋』・・・？」

「そう。向かうところ敵無し、最強のガーディアン、ヴァンだよ。だから、大丈夫だよ。」

シルキーを押さえていた男が手を離し、慰めるようにシルキーの頭に手を置いた。

「だから、シルキーちゃん。あの男は諦めな。」

気持ちに気づいていたらしく、皆一様に頷いた。

「で、でも、ヴァンさんがあの『護り屋』だって、あたし・・・ど

うしても信じられないよ・・・」

「それなら・・・」

窓際にいた男が、シルキーを促した。

そつと窓辺に立った。

そこからは、ロアもヴァンもよく見えた。

「見てると、わかるよ。」

シルキーはぎゅ、と両手を握り、外のヴァンを見つめた。

おぞましい敵

膠着状態が少しばかり続いた。

痺れを切らし、ヴァンが叫んだ。

「来るなら来い！ 来ないなら、こちらから行く！」
今にも走り出そうとした、その時だった。

「人間風情が……」

低くぞつとするような、おおそ人間では有り得ないような声が響いた。

「へえ、人語を喋るのか。頭が良いな。」

「食い尽くしてやる。」

がさ、と茂みが揺れた。

そこから、ぬつと巨大な獅子の足が見えた。

辺りに緊張が走る。かちゃ、とロアが弓を構えた。

茂みからのそりと出てきたのは、奇怪な魔獣であった。

体は獅子の姿をしているが、顔と耳は人間の形をしており、背にはこうもりのような羽がついている。特に歪なのが尾で、まるで蠍のように先端が鉤状に曲がっていた。

建物の中から恐れるように悲鳴が聞こえた。

「ふうん、マンティコアか。」

さもなんでもないかのように、ヴァンはじつと魔獣を見つめた。

「お気をつけください、ヴァン様。マンティコアの尾は蠍の五十倍の毒を持ち、遠くまで飛ばすことも可能です。」

「へっ。誰に言ってるんだよ、ロア。」

むう、とまた口を尖らせた。

「ご忠告したまででございますっ。」

「はいはい、お前も気をつけろよ。」

マンティコアに倣うように、茂みの奥からそろそろと魔獣が現れた。真っ黒な犬のような魔物だが、人間よりでかいかなりの大型である。

「ヘルハウンドどもですね。強靱な顎に注意です。」

「おし、サポート頼む。行くぜっ！」

それが合図のように、黒犬の魔物がいつせいに飛び掛ってきた。にやりと笑みを浮かべたまま、ヴァンは黒犬の一匹に狙いをつけた。

六匹の驚くほど太くて鋭い爪をひらりと避けると、真ん中にいた黒犬の腹部にふかぶかと左の剣を突き刺した。

痛みに咆哮を上げながら、なおヴァンを食いちぎろうとする。その前に出てきた首を、右の剣でやすやすと刎ねた。

どう見てもヴァンの細い腕では持ち上げることも不可能に見える大きく太い首が、胴体を離れてごろりと地面に転がった。

瞬時に左の剣を胴体から引き抜くと、続けざまに横にいた黒犬のわき腹に突き刺した。

恐ろしい唸り声を上げて黒犬が痛みに悶えた。それにも動じず、左の剣の上に右の剣を突き刺した。

「ファイアカクテル！ ショット！」

その声と共に、ヴァンの背後を狙って飛び掛った黒犬が一瞬のうちに炎上した。

振り返らず、にやりとヴァンは笑う。

「ナイスサポート、だな。」

そう言うと同時に、双剣に力を込めて左右に引き裂く。耳を劈くような声をあげ、絶命した。

「あと三匹イ！」

楽しそうに、ヴァンは横から飛び掛ってきた黒犬の額に剣を向けた。ずぶりと嫌な音がして、黒犬がだらりと垂れ下がった。

難なく剣を引き抜く。

その直後、前後挟み撃ちにするように黒犬が飛び掛った。

「ライトニング・ボルト！ ショット！」

ヴァンが前方の黒犬の頭を跳ね飛ばした瞬間、後ろの黒犬に巨大な雷が落ちた。飛び掛った格好のまま、黒焦げになった黒犬はどさり

と地に落ちた。

あつという間に、巨大な黒犬を全滅させてしまった。

「後は、お前だけだな。」

血で濡れた左の剣を、マンティコアに向けた。

「おのれ・・・人間どもめ・・・！」

マンティコアは獣の唸り声を上げた。びりびりと建物が震える。

「ロア。俺にやらせろ。」

すでに弓を引いていたロアが、首を振った。

「油断なさいますな、ヴァン様。」

「大丈夫。お前は毒が飛んでこないように気をつけてな。俺が仕留める。」

ヴァンは楽しそうに双剣を構えた。

「さあ、来いよ。マンティコア。」

「愚か者め。ここで食われるが良い！」

先ほどの黒犬とはまったく比較にならないほどの速さで飛び掛ってきた。

鋭い爪をまたひらりと避ける。だが、攻撃はそこで終わらなかった。

鉤状の尾が、ヴァンの死角から襲い掛かってきた。

「おっとお。危ね。」

動きが読めたのか、ヴァンの頭を尾が掠めていった。

その間にマンティコアは向きを変え、またヴァン目掛けて飛んできた。

双剣を交差するように構え、凶暴な爪を受け止めた。

ヴァンが後ろに跳ぼうとした瞬間、はっとして足元を見た。

足に、マンティコアの尾が巻きついていった。

「あ、やべっ。」

鉤の先端がヴァンの足に向かって延びた。

慌てて尾を切り落とす。そこから紫色の液体がどろりと流れ出した。

「ヴァン様！」

はっとして双剣を構えなおした、はずだった。

左に構えた剣が、爪によって弾かれた。

「食いちぎってくれる！」

剣を失った左腕に、マンティコアの巨大な牙が噛み付いた。

「っ！」

ぎち、みし、と嫌な音がしている。

「ヴァン様ア！」

ロアは弓を構え、魔力を矢に注ぎ込んだ。

「いい、ロア！」

ぎちぎちと音を立てる左腕とマンティコアを見ながらロアを制止した。

「このまま、腕をちぎってくれよう・・・」

腕を啜えながらマンティコアは笑った。

さらに強く力が加えられる。みちみち、と音がした。

「つてえな。この、猫野郎っ。」

汗を流しながらヴァンが苦笑った。

「食いちぎれるなら、やってみな。」

「言われなくても、やってやるわ。小僧っ！」

ぶちぶちぶち、と気持ち悪い音が、辺りに響いた。

龍の眼

「ヴァン様っ！」

げっげ、とマンティコアが気味の悪い笑い方をした。

「見たか、こそ・・・」

そこで、自分の異変に気づいた。

自慢の牙が、根こそぎ無くなっていたのである。

「な、何イ!？」

「へ、へへ・・・」

にや、とヴァンが笑った。

「残念だったなあ。お前の猫牙じゃあ、俺の腕は食いちぎれないみたいだなっ。」

楽しげに左腕を振ってみせた。千切られるどころか、牙が食い込んだ後すら残ってなかった。

地面にはひびが入ったマンティコアの牙が落ちていた。

「ば、バカな！ 人間如きに、この俺の牙が負けるはずがない！」

ヴァンは落ちていた剣を拾い上げた。不敵な笑みを浮かべている。

「あのさあ。お前さつきから人間人間って言ってるけど、外見で決めんなって話だよな。なあ、ロア？」

ほっとして弓を下ろしていたロアが、にこりと笑った。

「はいです、ヴァン様。」

「人間ではないだと？ ならば貴様らは魔人か!？」

「はずれだ。」

そう言った直後、ヴァンはそれまでとは段違いなほどの速さで、マンティコアの両前足を切り落とした。

痛みで叫ぶマンティコアを見ながら、楽しそうに笑う。

「魔人だったらお前の牙で食い破られてるだろうが。」

「ぐう・・・バカな。見えなかった・・・?」

驚きに戸惑うマンティコアの頭上に、いつの間にかヴァンが立って

いた。

「まだあるだろ？ 人間みたいな形の、最も頑丈な種族がさ。」

「何……？」

思いついたのか、はつとして動きを止めた。

「……いや、ありえん。そんなはずはない。」

「何？ 言ってみろよ。聞いてやる。」

遠くからロアがため息をつきながら声をかけた。

「ヴァン様！ お戯れも大概になさってください！」

けらけらと笑いながらロアに手を振った。

「いいだろ。少し遊ばせろよ。」

なんとか頭にいるヴァンを振り落とそうと首を振ったが、一向に降りる気配は無い。

「じゃあ、ヒントな。お前の考えてるやつ、言ってみろ。」

それまで首を振り続けていたマンティコアが、ぴたりと動きを止めた。

「……いや、この世界で人間族に近く最も頑丈な種族など、あるはずがない。」

「あるだろうが。俺の腕に噛み付いてまだわかんねえのか？」

「バカな……奴らは、もう……」

「お、それぞれ。言ってみろ。」

頭の上を飛び、マンティコアの眼前に着地した。

「俺の目見ても、わかんないか？」

瑠璃色に輝く、瞳孔が細い瞳。それを見て、マンティコアはぶるりと体を震わせた。

「な、何故貴様、『龍眼』を持っている！？」

「さあてね。何でかな。」

憎悪を滾らせた瞳で、マンティコアは唸った。

「やはり貴様ら……ドラグーンの生き残りか！」

にんまりとヴァンは笑った。だが、その目だけは殺気が漲っていた。

「お、正解。」

「ありえん・・・貴様らドラグーンは、あのお方が全て根絶やしにしたはず・・・」

その言葉に、それまでにやにやしていたヴァンの顔が凍った。

遠くから見ていたロアも表情を止めた。

不意に、ヴァンを取り巻く空気が変わった。

酷く冷たい、殺気の孕んだ空気に、一瞬のうちに変化した。

マンティコアは全身の毛が逆立つのを感じた。

己よりも危険で強大な敵に睨まれた時のように全身が動かない。

その凄惨なほどに美しい瞳から、目が離せなくなった。

「あのお方？」

酷く冷えた声で、見下しながら言った。

「あのお方ってのは、誰だ？」

全身が異常なほど震えているのを感じた。牙の無い口が、己の意思とは関係なくがちがちと鳴り続ける。

「お、俺らは、知らない。知らされていない。俺たち下っ端には何も知ることは出来ない。だから、どんな方かは知らない。ただ、そのお方を主として、俺らは動いているだけだ。」

「何も知らない？」

「そう、そうだ。何も知らない。知ることは出来ない。」

「そうか・・・」

ふと、ヴァンは持っていた双剣を上げた。

ただそれだけだった。

「なら、お前は要らないな。」

双剣が上がった瞬間、マンティコアの首は、地面に落ちていた。

何をされたのかもわからないまま、マンティコアはただその瞳を見つめながら、絶命した。

閉幕

血に染まった双剣をマンティコアの毛で拭い、軽く一振りした。それだけで、元の綺麗な双剣に戻った。

「ヴァン様！」

ロアが駆け寄ってきた。

「お怪我は？」

「見ての通り。一つもないよ。」

ほっとしてロアは笑った。

「ご無事で何よりです。」

「ああ。お前も大丈夫そうだな。」

ぼんとロアの頭に手を乗せた。すでに二人とも、瞳は元に戻っていた。

「さて、行こうか。」

「そうですね。荷物、持ってきて良かったですね。」

辺りは不気味なほどに静まり返っている。魔物がすべて倒されたというのに、誰一人出てくる者はいなかった。

皆、恐れていた。

魔物より遥かに強い、噂以上の二人に。

どう接していいか、わからないのだ。

町の外へと歩き出した二人に、美しい声が呼び止めた。

「待ってください、ヴァンさん！」

振り向くと、シルキーが震えながら立っていた。

「シルキーさん・・・お分かりになったでしょう？」

優しく、ヴァンは微笑んだ。

「あなたは・・・人間、ですよ？」

「・・・さあ、どうでしょうか。」

「・・・人間でも、人間じゃなくてもかまいません。ヴァンさん、私、あなたのことが。」

「おやめなさい、シルキーさん。」

シルキーの次の言葉を、ヴァンは優しく制した。

「あなたは美しい星の姫君です。俺は血で汚れきった獣だ。あなたとは到底釣り合わない。わかりますね？」

諭すように、そつと、呟いた。

「あなたに、幸せになってほしいから。」

そう言ったヴァンの顔はとても優しく、そしてどこか寂しげであった。

「ヴァンさん……」

涙ぐむシルキーに笑顔を返すと、行くぞ、とロアを促した。

振り返りもせず、二人は町の外へと出た。

しんと静まり返った中で、動いているのはただ二人だけだった。

「ヴァン様。」

「ん？」

ロアを見ると、悲しげにヴァンを見上げていた。

「あの星役の方、本気でヴァン様をお慕いしましたね。」

「……どうだろうな。ただ、内面も外面も美しい人だった。もし俺がこのままで、こんな境遇じゃなかったら、惚れてたかもな。」

「……こんな境遇じゃなかったら」

ふん、とロアは鼻を鳴らした。

「私はヴァン様の付き人になることは出来ませんでした。私は幸せ者です。」

ははつとヴァンは楽しげに笑った。

「そっぴやそうかもな。まあ、長い旅なんだ。楽しくいこうな。」

「でも女性を口説くのはもうやめていただかないと……私、父に合わせる顔が……」

「ああ？ お前だって綺麗な物は愛でるだろ？ それと同じだよ。」

「違います！ ヴァン様は何か……何か違うのです！」

ロアが持っていた重そうな荷物を軽々と担ぎ、にやりと笑った。

「それがわかれば、お前は大人の仲間入りだな。」

「教えてくださらないのですか？」

「自分で考えな。」

「むう。ヴァン様のひねくれ者！」

「ロアのがキンちょー。」

ロアはむうつ、と口を尖らせ、すたすたと先に足を速めた。笑いな
がら、ヴァンがその後を追う。

その先には、月が煌々と輝き。

旅路を、照らしていた。

閉幕（後書き）

ちよつと急ぎ足で終わってしまいました。機会があれば、もっと長くしていこうかと思っています。長らくお付き合いいただけたら嬉しいです。駄文失礼いたしました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0825m/>

呪われし龍姫 1 ～海の瞳を持つ男～

2010年10月10日11時28分発行